
See You Again!

夏向朔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

See You Again!

【コード】

N1497Q

【作者名】

夏向朔

【あらすじ】

少年に恨みを持つ少女が、少年を殺そうとする話。

(前書き)

人を殺してませんが、具体的な表現はありません。

本当にザッと書いたので、文法がおかしいところがあるかもしれません。

「まっ、待てってば！」

尻もちをついたまま、彼は私から一步後ろにさがる。

ひどいなあ、そんなあからさまに嫌がらなくてもいいじゃない。

私は彼への当てつけに、手の中で黒光りするものを彼に向けて一步進む。

案の定、彼は顔を引き攣らせてまた一步後ろにさがった。

ふふっ、いいザマ。

「なあ、***！ それ、下ろせよ。いくら、モデルガンでも洒落になんないからさ。な!？」

彼は必死に懇願するけど、私はソレを下ろさない。

きつと下ろした途端、彼は血相を変えて私に襲いかかって来るだろうし、なによりこれは彼を殺すために、わざわざ危ない道を通ってまで手に入れた？本物の銃なのだ。

下ろせるわけがない。

「いやよ。これはあなたを殺すために、わざわざアメリカから取り寄せたの。それより、クスクス言っでないで男らしく死ぬ準備でもしたら？」

さっさと彼を殺して、家に帰りたい。
今日は私が夕食を作らなくちゃいけないのに……。

「ねえ、もう準備は整った？」

笑顔で彼に問いかければ、彼は顔を青くしながら口を開いた。

「***、よく聞け。お前の両親だって、娘が人殺しになるなんて望んでないはずだ。だから」「うるさい」

それ以上彼の戯言を聞いていられなくて、私は銃口を彼の額に合わせた。

「ひっ……で、でもな***」

未練がましい。まだ何か言うつもりなの？

「ここは路地だが、少し進めばそこは大通りだ。じゅ、銃声を聞いて誰かが駆けつけてこないとも限らないぞ」

そう言うと、彼は勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

確かにここは人通りが全くない路地だけど、少し先は人がたくさん行き交う大通り。

銃声が聞こえれば、間違いなく誰か来るはず。

「……確かにそうね。ここで銃を撃ったら、誰か来ちゃうかも」

私がしょんぼりとそう言えば、彼はそれに便乗して殺害を止めさせようと、あれこれ私に言ってくる。

「だから***、やっぱりやめ」でもね」

残念ながら彼は、人が行き交う大通りで今日は何が行われるのかわからないらしい。

「大丈夫。今日は大通りで有名なバンドのゲリラライブがあるの。ライブ開始にね、小型だけど大きな音の鳴る爆竹が鳴るんだって。銃声を隠すのにはちょうどいいよね」

そう、今日は大通りで有名なバンドのライブがあるだ。

だから、ほとんどの人はそこに集まるだろうし、その人寄せのためにライブが始まると同時に爆竹が使われる。

たかだか一発の銃声を隠すにはもってこいの環境になるの。これ以上何も言えないくらい最高の環境よね。

・・・これでもう、彼を殺すのに戸惑う理由もなくなった。

ライブが始まるまで、あと10秒。

「10・・・9・・・」

私がなんのカウントを始めたのか分かったのだろう。

「***！ お願いだから、頼む！ 殺さないでくれ・・・」

彼は再び命乞いを始めた。

みっともないったらありゃしない。

そもそも、私に命乞いできるほどの立場じゃないクセに。

「8・・・7・・・6・・・」

カウントは止まらない。ライブの開始に近づくとつれ、彼の命も終りに近づいていく。

「死にたくない死にたくない死にたくない・・・」

彼がそう呟き始めたと思ったら、いきなり私に飛びかかってきた。

どうやら、私を殺してしまおうという考えに至ったらしい。

もうちょっと早く、その考えに気付けばよかったのにね。

ヒラリと攻撃をかわして、私は彼に足払いをかける。

「5・・・4・・・」

もちろんその間に、ちゃんと数を数えておくのを忘れない。

撃つタイミングを間違えたら、ぜんぶ水の泡になっちゃうもん。

足払いをかけられた彼は、足元を崩し、地面に倒れ込んだ。

再度攻撃を仕掛けようと、起きあがろうとする彼の後頭部に、銃を突きつける。

「3・・・2・・・」

殺されるって分かるこの状況は彼にとってツライと思うけど、大丈

夫。

苦しむことなく殺してあげるから。

これが私の最期の優しさ。

「1・・・」

口元が自然に上がるのが分かった。きっと今の私は、最高の笑顔を
しているだろう。

See You Again!

パンパンパン!

『パンッ』

パンパンパン!

近くで爆竹銃声が鳴り響いた。

(後書き)

最終的に一番可哀そうなのは、人を殺した手で作られた夕食を食べる家族のような気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1497q/>

See You Again!

2011年1月16日07時37分発行